

農業技術短報

No. 62, 2008.3.1
三重県科学技術振興センター
農業研究部
畜産研究部

【作物研究の成果】 大豆の浅耕栽培における基肥施用が生育に及ぼす影響 …… 2	新サツキの長穂苗による早期コンテナ栽培法 …… 6 シクラメンの日持ちに影響する要因 …… 7
【果樹研究の成果】 マルチ処理によるニホンナシ「福水」の熟期促進技術 …… 3	【経営研究の成果】 消費者が好むトンカツ用豚ローススライス肉の外観・8 〈トビックス〉 平成18年度に行った学会発表・論文投稿・講演等 …… 9～10
【野菜・花き研究の成果】 養液栽培ホウレンソウの培養液に尿素を活用すると 硝酸塩濃度を削減できる …… 4 防虫網によるトマト栽培終了時のタバココナジラミ 逃亡防止効果 …… 5	

温故知新

農業研究部 部長 橘 尚明

戦後ひた走りに走って、均一大量生産、加工貿易によって多くの物を得、豊かな生活を手に入れた。しかしその一方では失う物も多かった。20世紀の科学技術は、ひたすら短時間で物事を処理できるように、便利なようにと様々な物を造りだし、我々はそれを享受してきた。気がついてみると、忙しさに拍車がかかったような気がする。グローバル化への対応は避け難いが、これまであまりにも経済が優先し、それに我々のライフスタイルが従属させられてきたと思う。そして最近になって、経済的事情や食料の内容と質も急変し、お金を払えばいつでも必要な食料を必要量輸入できる時代は終わろうとしている。この理由は、発展途上国における高い経済成長率や世界人口の急激な増加傾向、地球温暖化による砂漠化、さらには食料作物からバイオマスエネルギー源への転換などを考え合わせると、飽食を享受している我国に食糧危機が表面化するリスクが日増しに高まりつつある現実を認識しておかねばならない。

しかし、一方急速な日本経済の変貌は、

自ずと過疎化、都市化へと進展し、その過程において地球温暖化、水質汚染などの環境問題をも引き起こしてきた。食を支える農林水産業も人為的に物質や資源を偏在させるため、とりわけ農業や化学肥料については環境汚染物質として懸念され、現状認識にたった産業振興から将来を見据えた持続可能な農業への展開が求められる今日である。

これまで対称軸として捉えられてきた「生産性」と「環境」を、減農薬・減肥料化への技術開発を核として、生産性を落とすことなく調和軸まで発展させる新技術の開発・導入が急務となってきた。その技術は、論理的かつ効率的であるべきだが、理念の根幹、仮説のスタートにおいて郷土の文化や歴史を土台にした情緒的な要素を大切にしたいものである。棚田や里山の風景を自然観として、また里山にはどこことなく郷愁に誘われ、また実り豊かな農村風景を眺めていると心が和む。日本人としての原風景を守り続けるために私達は、今何ができるのか非常に重要な局面に立つ。

三重県科学技術振興センター農業研究部

〒515-2316 三重県松阪市嬉野川北町530
TEL 0598-42-6357 FAX 0598-42-1644
<http://www.mate.pref.mie.jp/marc/>

三重県科学技術振興センター畜産研究部

〒515-2316 三重県松阪市嬉野町1444-1
TEL 0598-42-2027 FAX 0598-42-2043
<http://www.mate.pref.mie.jp/livestock/>